

## 俳句と Haiku

### 英語になった俳句を通して英語、そして日本語を考える

#### 導入：俳句の英訳とどうつき合うか。

旅に病んで 夢は枯野を かけめぐる (芭蕉)

(0a) Ailing on my travels,  
Yet my dream wandering  
Over withered moors.

(0b) Ill on a journey:  
My dreams wander  
Over withered moor.

(0c) On a journey, ill  
and over fields all withered; dreams  
go wandering still.

- ・「旅」と 'travels' / 'journey' (Cf. 'life's journey').
- ・「病んで」と 'ailing' / 'ill'.
- ・「夢」と 'dream' / 'dreams', 'my dreams' / 'dreams' (Cf. "I raised the hand, but the teacher did not see it and so did not call upon me." (Bischoff 1974).)
- ・「かけめぐる」と 'wandering' / 'wander' / 'go wandering'.
- ・「枯野」と 'withered moors' / 'withered moor' / 'withered fields'.
- ・「旅に病んで(ソレデモ)夢は」と 'yet' / ':' / 'still' ((0a)で 'yet' は行頭に置かれているのに、(0c)では 'still' が行末に置かれているのはなぜか.)
- ・(0c)の語順と行の切り方.

#### 例1：古池や かはづ飛びこむ 水の音 (芭蕉)

(1a) The quiet pond  
A frog leaps in  
The sound of the water. (E. Seidensticker 1921-2007)

(1b) The ancient pond  
A frog leaps in  
The sound of the water. (D. Keene 1922-)

(1c) Into the calm old lake  
A frog with flying leap goes plop!  
The peaceful hush to break. (W. N. Porter)

(1d) A lonely pond in age-old stillness sleeps ...  
Apart, unstirred by sound or motion ... till  
Suddenly into it a lithe frog leaps. (C. H. Page)

(1e) Oh thou unrippled pool of quietness,  
Upon whose shimmering surface, like the tears  
Of olden days, a small batrachian leaps,  
The while aquatic sounds assail our ears. (L. H. Hubbell)

(Cf. Thou still unravish'd bride of quietness,  
Thou foster child of silence and slow time,  
... J. Keats: Ode to a Grecian Urn)

・「古池」は 'old pond' でよいか。Cf. サイデンステッカー・那須 (1962)、佐藤 (1987)。

・「かはづ」は 'a frog' か 'frogs' か。Sato (1983)、佐藤 (1987) で言及されている統計によると、100 個の英語訳のうち、'a frog' が 98 例、'frogs' としているのが 2 例。後者の 2 例のうち、1 例は小泉八雲 (Lafcadio Hearn) による翻訳：

Old pond – frogs jumped in – sound of water

日本文化に深い共感を抱いていた八雲がどうして複数形を選んだのか。Cf. 英語の複数形は〈数〉を表すだけではない：〈量〉 (deep waters of the sea)、〈種類〉 (wines)、〈程度〉 (silences of the night)、〈回数〉 ('Blue skies shining over me / Nothing but blue skies do I see' ピーターセン (1990)、'three years'、'Many thanks!' (ドイツ語、'Vielen Dank!' では量扱い))。

・昼の句か夜の句か(李 1983)。

・春の季語としての蛙(春で目覚めた蛙が池に飛び込むことによって、年が新しくなる：cf.「新米」)。

・(1c) の訳の風変りな特徴：'pond' でなく 'lake'、切れ字の代わりに 'into'、語順の倒置、原句で言われていないことを表現する。

・子規による訳(古池の句の英語訳としては、もっとも早いもの)：

The old mere! / A frog jumping in, / The sound of water.

・具象詩 (concrete poetry) として

o g  
r  
f frog

・パロディ (parody) として

Old pond a frog rises belly up. (M. Mountain: 1939-)

## 例2：枯れ枝に 烏のとまりたるや 秋の暮 (芭蕉)

句全体を通しての暗い雰囲気 — それを支える三つの表現：「枯れ枝」—「烏」—「秋の暮」— 三つを特徴づける二層の意味：「枯れ枝」は<枯死した枝>なら<死>、<落葉した枝>なら<黒ずんだ感じ>、「烏」は<死>の象徴であると同時に<黒い>色の鳥、「秋の暮」は<秋の夕暮>なら<暗い>と同時に一日の<終り>、<晩秋>(cf. 「年の暮」)なら<(季節の)終り>と同時に<薄暗い>印象 — 全体を通して<死>/<終り>と<黒い>/<暗い>という二層の意味が共通であることによって全体が一つの構造としてまとめあげられている — その上、三つのキーワードが /k/ の頭韻(「カレエダ」—「カラス」—「クレ」)でまとめあげられている。訳者はこの「構造」をどれ位意識しているか。

(2a) Autumn evening;

A crow perched  
On a withered branch.

(2b) On a withered branch

A crow has settled —  
Autumn nightfall. (H. Henderson 1958)

(2c) On a bare branch

A rook roosts:  
Autumn dusk. (G. Bownas and A. Thwaite 1964)

(2d) The end of autumn, and some rooks

Are perched upon a withered branch. (B. H. Chamberlain 1850-1935)

・「枯れ枝」と 'withered branch'、'bare branch'.

・「烏」と 'a crow'、'rooks'. Cf. 漢詩の詠題としての「寒鴉枯木」.

・「とまりたるや」(「たり」<「つ」(完了)+「あり」(存在):<結果としての状態>・後に「とまりけり」(「けり」<「き」(来)+「あり」(存在):<気づき>)と改訂)と 'perched' (過去分詞)、'has settled'、'roosts'、'are perched'

・「秋の暮」と 'autumn evening'、'autumn nightfall'、'autumn dusk'、'the end of autumn'.

・子規による訳: On a dead branch, / A clow [crow] lighted; / The evening of autumn.

・中国語話者は「枯れ枝」の句から馬致遠「天浄沙・秋思」を連想すること(大連外語大、陳岩教授).

枯藤の老樹 昏の鴉、小橋の流水 人家、古道の西国 瘦馬、西に下れば断腸の人。

・「枯れ枝」の句の中国語訳:

秋日黄昏時 / 形单影只一烏鴉 / 兀立在秃枝。

### 例3：岩鼻や ここにもひとり 月の客 (去来)

「月の客」とは誰か。

去来：岩鼻に座って月を愛でている人物は他人—〈主客対立〉の構図

芭蕉：岩鼻に座って月を愛でている人物は自分—〈主客合一〉の構図

「ここにもひとり」を英訳するとしたら、

〈月の客〉が別人なら、“Here is another one.”

〈月の客〉が自分なら、“Here I am.”

しかし、もう一つの可能性：〈月の客〉が自分であるとした上で、“Here is another one.” と言う場合—(自己にとって)〈主客合一〉的な状況が(他者としての視点から)〈主客対立〉的に捉えられるという場合。

### 終りに：俳句の生まれる場とは？

作者がふと眼にした心引かれる情景をくいま・〈ここ〉の自らの体験として語る。過去の出来事であっても、自らが見る対象(客体)と一体化する(主客合一)。結果的には俳句として言語化されるのは、作者が眼にした情景だけで、臨場している作者自信は言語化されない。

読者は、俳句に語られているのは作者の客観的な観察に基づく情景ではなく、作者が現に眼のあたりにし、強く心を引かれている情景として接しなくてはならない。そして自らを作者と同じ場において作者の体験を追体験する。作者と同じ体験をなし得たという確信がもてればそれは読者にとって限りない喜びとなろう。読者の側での共感的な参与へ向けての積極的な意欲のない限り、俳句は「それがどうしたの」(‘What of it?’)といった程度の反応しか読者に呼び起こしてくれない。

### 参考文献

復本一郎 (1988) 『芭蕉古池伝説』大修館書店。

池上嘉彦 (2000) 『日本語と日本語論』講談社学術文庫。

池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚と日本語の感覚』日本放送出版協会。

池上嘉彦 (2011) 「日本語話者における〈好まれる言い回し〉としての〈主観的把握〉」『人工知能学会誌』26-4。

IKEGAMI, Yoshihiko (2014) ‘Haiku and the Japanese Language: How to Come to Terms with the Shortest Literary Form in the World’, Kyoko KOMA, ed., *Japan and Europe in Global Communication*, Mykolas Romeris University, Vilnius.

キャンベル、ロバート (2010) 『J フンガク—英語で出会い、日本語を味わう名作』東京大学出版会。

李御寧 (1993) 『蛙はなぜ古池に飛び込んだか』学生社。

日航財団編 (1991) 『世界「子供の俳句」コンテスト』学生社。

日航財団編 (1995) 『地球歳時記』マガジンハウス。

サイデステッカー、エドワード・那須聖 (1962) 『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』培風館。

坂井孝彦 (2010) 『英語で味わう日本文学』東京堂出版。

SATO, Hiroaki (1983) *One Hundred Frogs*, New York: Weatherill.

佐藤敏彰 (1987) 『英語俳句』サイマル出版会。

佐藤和夫 (1991) 『海を越えた俳句』丸善新書。

## 付 録

### 要約：俳句の英訳とどのように付き合い、どのように楽しむか。

- ・扱いたいと思う日本語の俳句を一つ選ぶ。(できれば、自分がよく知っている句、どう解釈するかを学んだことのある馴染みの句がよい。)
- ・その句の英語訳をいくつか集める。(俳句の英語訳は現在では多数刊行されているから、同じ句の異なる訳者による異なる訳を複数個集めるのは、たいして困難なことではない。英語話者による英語訳だけでなく、日本語話者による英語訳も加えられればなおさら面白い。)
- ・原句を構成する日本語の主要な語句に注目し、それに対応する語句が英語訳に見いだせるかどうか検討してみる。見つかる場合は、その英語の語句を(学習者用の)英英辞典(例えば、*Longman Dictionary of Contemporary English*とか *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Contemporary English*)に当て、英語話者にとってどのようなイメージを喚起する語句なのかを確認する。見つからない場合(原句の日本語の語句に対応する英語の語句が英語訳にみつからないという場合だけでなく、原句には対応する日本語の語句がないのに、英語訳で加えられている語句があるという場合もある)は、訳者の意図はどういうことかを考えてみる。
- ・複数個の英語訳のある場合は、その一つ一つについて上記のような検討を加える。同一の日本語の語句に対して用いられている英語語句について異なる訳者の間で著しく選択の差のある場合は、どの英語訳が原句の日本語の語句の意味合いに近いかを考察する。
- ・全体としての印象が日本語の原句から受ける印象にもっとも近いと思われるのはどれかを検討する。
- ・音楽の場合にたとえてみると、あるメロディーが別の(あるいは同一の)作曲家によってさまざまに「変奏」される場合と類比できる。もとのメロディーに潜在的に内包されていたさまざまな可能性が変奏という営みを通して解き放たれ、顕在化してくる過程を楽しむ。
- ・どの言語にもその構造上の特徴からして、どうしても明示的に言及しなくてはならないこと、明示的に言及してもしなくてもよいこと、どうしても明示的に言及できないことがある。言語の話者はそのような制約のもとで、どのように言語を処理すれば自らの思いをもっとも完全に表現しうるかということで自らの言語と取り組む。その試みは多くの場合、ことば、心におよぼすという諦めか妥協で終ることになるが、場合によっては、自らの言語に内包されていた新しい表現の可能性の発見に連なり、言語の進化に寄与することもありうる。翻訳者の場合は、既にある制約のもとに言語でまとめあげられた内容が一旦解体され、それを別の制約を有する言語で組み替えるという課題との取り組みが実践されているわけで、すぐれた翻訳が創造に連なることもある。

|| **haiku** ('haku:). Also haikai, hokku. [Jap.] A form of Japanese verse, developed in the mid-16th century, usually consisting of 17 syllables and originally of jesting character; an English imitation of one.

The *hokku* was originally the opening hemistich of a linked series of *haiku* poems, but is now synonymous with *haiku* and *haikai*. An earlier meaning of *haikai*, an abbreviation of the phr. *haikai no renga* ('jesting linked-verse'), was a succession of *haiku* linked together to form one poem.

1899 W. G. ASTON *Hist. Jap. Lit.* iv. 289 In the sixteenth century a kind of poem known as Haikai, which consists of seventeen syllables only, made its appearance.

**hai-ku** /'haku:/ *n plural haiku or haikus* [C] a type of Japanese poem with three lines consisting of five, seven, and five SYLLABLES

**hai-ku** /'haku:/ *n (plural haiku or haikus)* [C] a type of Japanese poem with three lines consisting of five, seven, and five SYLLABLES

WHICH WORD?

journey / travel / trip



Nouns

Journey = an act of travelling from one place to another. In BrE it can be long, or short but regular: to go on a 6 000-mile journey ◦ How long is your journey to work?

Trip = a journey to a place and back, especially for a short visit. to go on a trip to Disneyland ◦ a business trip.

In AmE trip is used instead of journey for a short distance: The trip takes about 45 minutes.

Travel is an uncountable noun that means the general act of travelling: She loves travel, ◦ The price includes air travel.

Travels [pl] means several journeys to other places or countries, especially far away.

Verbs

To travel puts emphasis on the journey itself: to travel abroad ◦ I usually travel by air.

If you are thinking more about the place you are going to than the journey itself, use to go: I'm going to Italy on Friday. ◦ Do you go to New York often? ◦ I'm travelling to Italy on Friday. ◦ Do you travel to New York often?

— see also EXCURSION, TOUR, VOYAGE

ail / eil/ v 1 what ails sth formal the thing or things that are causing difficulties for something: This initiative is not the answer to what ails our educational system. 2 [I, T] old-fashioned to be ill, or to make someone feel ill or unhappy

withered / 'wiðəd \$ -əd/ adj 1 a withered plant has become drier and smaller and is dead or dying 2 a withered person looks thin and weak and old 3 a withered arm or leg has not developed properly and is thin and weak

moor<sup>1</sup> / muə \$ mur/ n [C usually plural] especially BrE a wild open area of high land, covered with rough grass or low bushes and heather, that is not farmed because the soil is not good enough: They went grouse shooting up on the moors. | the Yorkshire moors

pond 罟 / pɒnd \$ pɔ:nd/ n [C].

1 a small area of fresh water that is smaller than a lake, that is either natural or artificially made  
2 across the pond also, on the other side of the pond informal on the other side of the Atlantic Ocean in the US or in Britain: my cousins from across the pond

■ 全く同じ意味の訳語は少ない

さてことばというものは、上に述べたように、特定の条件のもとに生まれ、時にはそれに新しい意味がつけ加えられたり、あるいはその逆に、それがもっていた意味のあるものが時代の変遷とともに失われてゆくものであるから、日本語のあることばとちょうど同じ意味をもち、それ以上の意味をもたない外国語のことばを見出すことは非常にむずかしい。

たとえば、「古い」ということばをとってみよう。英語には "old", "aged", "ancient", "antique", "used" など、いろいろな訳がある。どういう場合にどの訳を当てるかは、そのことばが、どういう意味で使われているかを考えた上で、適切な英語を見つけなければならない。これは日本語の「古い」ということばでも、時によって違った意味に使われる訳換である。

ところが場合によっては「古い」というような一般的に使われることばでも、英語国民にない感覚を表わしていることがある。そういう場合には、「わび」、「あわれ」などの訳語が絶望的であるように、「古い」ということばの翻訳すら、絶望的になってしまう。たとえば芭蕉の「古池や、蛙とびこむ、水の音」をとってみると、この「古い」はどうにも訳しようがない。「The old pond」とすれば、何となく馬鹿気たものになる。むしろ意味をなさないといい、それは日本人が「池」という語にもっているイメージと英語国民が "pond" に対してもっているイメージに多少ずれがあるからである。日本語で「池」といえば、それが石造りであろう

と、コンクリート造りであろうと、あるいは磨先きを掘ってつくり、それにこけが生えたものでであろうと、水を滑たした入れものという意味が強く出ているが、「pond」といえば、中に入っている水のほうが強く感じ取られる。したがって「the old pond」とすれば「年をとった水」というのと同じように馬鹿気た響きをもつことになる。これを「the aged pond」とすれば、池や、その中の水が何か生きもののような感じになっておかしい。「The antique pond」とすれば、まず骨董品が頭に浮かんで、骨董品と池とを結びつけたナグハグなものになる。そうかといって「the ancient pond」とすれば「古代の池」という感じがして、芭蕉が「古池や」と呼んだ気持ちは全然ない。こうしてみると、かなり広く使われる「古い」ということばでさえ、英訳できなくなってしまう。こういういろいろの不満があるので、これを

The quiet pond

A frog leaps in.

The sound of the water.

と訳してみよう。これよりいい訳はちょっと考えられないが、それでも原作の味は失われて、物理的なものだけが残ってしまう。そして「古池や」の「や」が現わしている、呼びかけるような、また自然にとけこんだような感じはなくなってしまっている。「かわず」は生物学的な「かえる」になってしまっている。そして全体として、水の音があたりの静寂を破り、それがかえって静寂さを印象づけるという余韻はない。

(エドワード・サイデンステッカー／郭頌聖 共著「日本語らしい表現から英語らしい表現へ」1962年、培風館より)

"Old pond" in English might suggest a stinking body of water, black, weedy and stagnant, while *furuike* brings to a Japanese mind a picture of an attractive stretch of water surrounded by moss-covered stones, fine trees, and green rushes and so on. (*The Japan Times*, June 11, 1983)

古池の「古」の訳

old	71.0%
ancient	12.1
quiet	3.7
silent	3.7
mossy	3.7
other	5.8

古池の「池」の訳

pond	92.5%
pool	5.6
lake	1.9

弥生も名残をしき此にやありけむ。蛙の水に落る音しばくならねば、言外の風情この筋に  
うかびて、蛙飛こむ水の音、といへる七五は得玉へりけり。

向ふ人もなく、あれ果たる芭蕉庵の春雨に、ひとり柱に打もたれて、来しかた行末の事共を  
観念するに、庭の古池を、折く蛙のつぼんと飛込音、其淋しさ、閑さ、言語に述る処  
に不有。

古池や蛙飛びこむ水の音 芭蕉  
といふ句を見て、作者の理想は閑寂を現はすにあらんか、禪學上悟道の句ならんか、  
或は其他何處にかあらんなど、穿鑿する人あれども、それは只其儘の理想も何も  
無き句と見る可し。古池に蛙が飛びこんでキャプンの音のしたのを聞きて芭蕉がし  
かく詠みしものなり。

**perch**<sup>2</sup> v 1 be perched on/above etc sth to be in a position on top of something or on the edge of something: a house perched on a cliff above the town 2 perch (yourself) on sth to sit on top of something or on the edge of something: Bobby had perched himself on a tall wooden stool. 3 [I + on] if a bird perches on something, it flies down and sits on it

**night-fall** /'naɪtfa:ɪl \$ -fo:ɪ/ n [U] old-fashioned the time when it begins to get dark in the evening; 日暮: Don't worry, we'll be back by nightfall.

**dusk** /dʌsk/ n [U] the time before it gets dark when the sky is becoming less bright; 日暮: The street lights go on at dusk. → see picture at DAWN

**settle** [sɛt] [wɛt] /'setl/ v

6 MOVE DOWN: [I] a) if dust, snow etc settles, it comes down and stays in one place: [+on] Snow settled on the roofs. b) if a bird, insect etc settles, it flies down and rests on something: [+on] A fly kept trying to settle on his face. c) if something such as a building or the ground settles, it sinks slowly to a lower level: The crack in the wall is caused by the ground settling.

**roost**<sup>2</sup> v [I] 1 if a bird roosts, it rests or sleeps somewhere 2 sb's chickens come home to roost used to say that someone's past mistakes are causing problems for them now

岩端やここにもひとり月の客 去来

先師上洛のとき、去来いはく、酒室はこの句を「月の猿」と申しはべれど、予は「客」まさりなんと申す。いかがはべるや。先師いはく、「猿」とは何事ぞ。故この句をいかに思ひて作せるや。去来いはく、明月に乘じ山野を吟歩しはべるに、岩頭また一人の騷客を見つけたる、と申す。先師いはく、「ここにもひとり月の客」と、おのれと名乗り出でらんこそ、いくばくの風流ならん。ただ自称の句となすべし。この句はわれも珍重して、笈の小文に書き入れける、となん。退いて考ふるに、自称の句となして見れば、狂者のさまも浮かみて、初めの句の趣向にまされること十倍せり。まことに作者その心を知らざりけり。

## お月見

小林秀雄

知人からこんな話を聞いた。ある人が、京都の嵯峨で月見の宴をした。もつとも月見の宴といふやうな大袈裟なものではなく、集つて一杯やつたのが、たまたま十五夜の夕であつたといつたやうな事だつたらしい。平素、月見などには全く無関心な若い会社員たちが多く、さういふ若い人らしく賑やかに酒盛りが始つたが、話の合ひ間に、誰かが山の方に目を向けると、これに釣られて誰かの目も山の方に向く。月を待つ想ひの誰の心にもあるのが、いはず語らずのうちに通じ合つてゐる。やがて、山の端に月が上ると、一座は、期せずしてお月見の気分支配された。暫くの間、誰の目も月に吸寄せられ、誰も月の事しかいはない。

こゝまでは、当り前な話である。ところが、この席に、たまたまスイスから来た客人が幾人かゐた。彼等は驚いたのである。彼等には、一変したと見える一座の雰囲気が、どうしても理解出来なかつた。そのうちの一人が、今夜の月には何か異変があるのか、と、茫然と月を眺めてゐる隣りの日本人に、怪訝な顔附で質問したといふのだが、その顔附が、いかにも面白かつた、と知人は話した。

スイスの人だつて、無論、自然の美しさを知らぬわけはなかつたらうし、日本にはお月見の習慣がある、と説明すれば、理解しない事もあるまい。しかし、そんな事は、みな大雑把な話であり、心の深みに追入つて行くと、自然についての感じ方の、私たちとはどうしても違ふ質がある。これは口ではいへないものだし、またそれ故に、私たちは、いかにも日本人らしく自然を感じてゐるに比べて平素は意識もしない。たまたまスイス人といつしよに月見をして、なるほどと自覚するが、この自覚もまた、一種の感じであつて、はつきりした言葉にはならない。スイス人の怪訝な顔附が面白かつたで済ますよりほかはない。



鳥たちが旅をする

空のハイウェイ

すごい大旅行

Birds are traveling  
In the highways of the sky  
Amazing journeys

Mary Jane L. Bauzon (12)  
PHILIPPINES (フィリピン)

そら耳に

なまはげの声

冬の海

Wild winter ocean:  
I thought I heard  
The voice of a monster

白鳥 真理子 Mariko Shiratori (12)  
JAPAN (日本)

あおいうみ

かにはうまれた

ばかりです

In the blue sea  
A baby crab  
Has just been born

O mar azul  
e o siri  
acabando de nascer

Ellsângela Aparecida de Mota (10)  
BRAZIL (ブラジル)

果てしない

空と海とが

青いシンフォニーを奏<sup>は</sup>てる

The infinity of the sky  
The immensity of the sea  
A symphony of blue

Infini du ciel  
Immensité de la mer  
Symphonie de bleu

Lorraine Mouslin (12)  
FRANCE (フランス)

Searching on the wind,  
the hawk's cry  
is the shape of its beak. (J. W. Hackett)  
1963

Lily:  
out of the water . . .  
out of itself. (N. Virgilio)  
1963

Sunset: carrying  
a red balloon, he looks back . . .  
a child leaves the zoo. (W. F. O'Rourke)  
1964

The town clock's face  
adds another shade of yellow  
to the afterglow. (N. Virgilio)  
1964

A bitter morning:  
Sparrows sitting together  
Without any necks. (J. W. Hackett)  
1964

The old rooster crows—  
out of the mist come the rocks  
and the twisted pine. (O. M. B. Southard)  
1965